

『維摩經』サンスクリット原典発見の意義

松濤誠達

一 ポタラ宮所蔵文献調査の実現まで

チベット。最近は、「残された秘境」、「神秘の国チベット」としてテレビや雑誌で頻繁に紹介されるようになったが、仏教学者が彼の地にいだく憧憬は一般とは自ずから異なったものであろう。一九九九年七月、大正大学の調査チームが、チベット仏教と政治の中心地であり、歴代ダライ・ラマの眠るポタラ宮の仏教文献調査を果たしたのは、仏典探索の先駆者として初めてチベットに密入国した河口慧海（大正大学教授、一八六六一一九四五）がポタラ宮の聳えるラサ（拉薩）の地に入ってからちょうど一〇〇年目の夏であった。

1 『瑜伽師地論声聞地』の出版まで

徒歩でヒマラヤ山を超えろという決死行を敢行した河口慧海の偉業に比すれば、それほど遠い道程ではなかったのかも知れない。発端は、大正大学総合佛教研究所が一九九〇年七月に行った北京の民族図書館所蔵の仏教文献



ポタラ宮全景

調査であった。当時、民族図書館にはチベットから移管されたかなりの部数のサンスリット写本が秘蔵されており、世界中の研究機関からその閲覧と公開が待ち望まれていた。総合佛教研究所は、真野龍海所長（当時）をはじめとする関係者のご尽力もあって、その閲覧調査を許された。そして、両者の学術的な交流は、サンスクリット写本の影印版の日中共同出版の合意を得るにまで到ったのである。選ばれたのは『瑜伽師地論声聞地』であった。

『瑜伽師地論』は仏教の重要な概念・思想が数多く説かれている大著であり、三蔵法師玄奘（六〇〇―六六四）はこの『瑜伽師地論』の写本を求めてインド旅行に出かけたとも言われるほどである。「声聞地」はその第十三章にあたるが、この「声聞地」だけでも貝葉（多羅樹へオウギヤシ）の細長い葉をなめし、長方形に切り取って経文を書き写したもの。数は一三四葉にのぼる。「声聞地」のサンスリット写本は、六〇年程前、ラーフラ・サンクリトヤーヤナというインド人学者によって発見され、写真撮影されたものが出版されていた。しかし、それは八枚から一〇枚の写本が一度に一枚の写真に収められており、文字も小さく不鮮明で、解読に非常な労力を必要とする代物であった。そのため、研究者からは写本の再発見と出版が待望されている重要な論書であった。

当初、印刷のための写真撮影も終わり、出版事業は順調に推移しているように

思われた。ところが、翌一九九一年一月、民族図書館から一方的に出版延期が通告され、両者の関係はかなり険悪なものに変わっていった。しかし、真野教授、林亮勝所長（当時）等が幾度となく訪中し、この文献がどれほど貴重で世界中の研究者が待ち望むものであることを誠心誠意伝え、中国側の民族的な問題、政治的な事情を考慮しながら諦めることなく中国側と交渉を行った。真情は伝わり、次第に民族図書館との間に固い信頼関係が築かれ、ついに一九九四年九月中国側関係者が来日し、『瑜伽師地論声聞地』影印版二百部が大正大学に引き渡されたのである。

2 学術交流事業の進展

このとき『瑜伽師地論声聞地』を携えて来日したのは、民族図書館の李久埼館長、包音副館長、チベット自治区文物管理局の王明星副局長、それにポタラ宮管理処の究達副処長の四名であった。彼らは一週間ほど日本に滞在し、その間に東京近郊や京都・奈良の寺院を数多く参観して、日本仏教の伝統と文化に大きな感銘を受けたようである。特に、日頃からチベット仏教の伝統に親しんでいる王明星、究達の両氏は、僧侶としても活動している大正大学の研究者達に、チベットの僧侶に対するのと同様に、一種の「敬意」をもって接してくれていることが感じられた。この人的な交流を通じて、大正大学が単に学問的な興味を超え、同じく仏教を信奉するものとして、誇りをもってチベットの仏教とその文化を世界に紹介しようとしていることが、中国側に理解されたと確信している。

この後、民族図書館との学術交流事業は、順調に進展していった。『瑜伽師地論声聞地』に続いて、一九九七年には真言宗等で読誦される「光明真言」の唯一の典拠であり、インド密教の展開過程を考察される上で不可欠とさ

れる『不空羅索神変真言経』、さらに一九九八年には『大衆部中説出世部律・比丘威儀法』のサンسكريット写本の影印版を共同出版することができた。またその一方で、総合佛教研究所は文部省科学研究費の助成を受けて、中国国内のチベット仏教の根拠地である青海省の中心寺院塔爾寺（以下、タール寺と記す）の所蔵仏教文献の現地調査を、一九九三年から一九九六年にかけて三度にわたって実施した。また短期間ではあったが、タール寺の青年僧二名を大正大学に迎え、日本の仏教文化に肌で触れてもらっている。こうした大正大学の取り組みもまた、チベット自治区関係者に高く評価されたようである。これらの交流活動の結果として、一九九七年五月、チベット自治区文物管理局からポタラ宮所蔵のサンسكريット語仏教文献の調査について内諾が得られたのである。

3 初めてのチベット入り

一九九七年七月二二日、成田空港に集まった大正大学のチベット調査団は、サポートスタッフを含めて総勢二五名に膨れ上がっていた。その中には、これまで幾度となく訪中し、民族図書館との学术交流事業を担ってきた斎藤光純大正大学専任講師（当時）の姿もあった。斎藤先生は、二〇〇二年六月、惜しくも七十二歳で急逝されたが、チベット学者としてチベットの文献調査に懸ける思いは人一倍で、このチベット滞在中かなり重そうなビデオカメラを片時も離さず、チベットのあらゆるものを記録に残そうとしていた姿は忘れることができない。

全行程で十日間という限られた日程のため、成田から上海、同日のうちに上海から四川省の成都、一泊して早朝六時の飛行機でラサに入るといふ強行軍である。それほど若いとは言えない調査スタッフが、疲れないわけはない。念願のチベットに入ることはできたものの、高度三七〇〇メートルを超えるラサで待っていたのは、まず旧知



ポタラ宮を望む



トウナン寺で五体投地をする巡礼

の友となっていた王明星氏や究達氏らチベット自治区文物管理局関係者と高山病の熱烈な歓迎であった。宿舎となったラサのホリデー・インに入ると、すぐさま病院探しが始まった。しかし、ホテルの周りに設備の整った病院は皆無であった。そこで、通訳として同行してくれた総合佛教研究所の牛黎涛（現在は大正大学講師）君の卓越した交渉能力によって、ホテルから車で三〇分ほどの距離にある中国人民軍の病院に重症者を運ぶこととなり、最初の難関を越えることができたのである。

しかし、高山病は試練の始まりでしかなかった。翌日、未だ高地に順応していないため急な階段を息を切らしながら昇り降りしてポタラ宮を隅々まで見学し、テラスにある高原特有の眩いばかりの陽光の射しこむ休憩室で休んでいると、突然チベット側から今回はポタラ宮の調査を見送ってほしいとの申し入れがなされたのである。しかし、我々もこうした事態を全く予想していなかったわけではない。民族問題をはじめとして、チベットの抱える事情は複雑で、我々もそう容易くチベット仏教の総本山



ダライ・ラマの霊廟



チベットの仏像（ポタラ宮）

であるポタラ宮の調査が実現するとは見込んでいなかったのである。

不安の中した。だが、チベット側からノルブリンカ（ダライ・ラマの夏の離宮）の所蔵仏教文献の調査が提案され、我々もこれを喜んで了承した。その晩、大正大学一行のために開かれた歓迎宴の後、バスに乗り込んだ一行を呼び止め、漢族の関係者の目を盗んでまでポタラ宮の調査が実現できなかったことを詫びたチベット族の強巴格桑ポタラ宮管理処長、究達副処長の誠実な態度は忘れることができない。かえって、このことで我々はポタラ宮調査の実現を確信したのである。

その翌日から、早速ノルブリンカ所蔵のサンスリット語写本の調査が始まった。結論から言えば、ノルブリンカに所蔵されていたサンスクリット語写本は北京の民族図書館から返還されたものがほとんどで、既に民族図書館の

所蔵文献の調査を終えている大正大学の調査チームにとって目新しい文献はほとんど発見されなかった。しかし、この調査を通じて、チベットの人々と同じように仏像に礼拝し、手を合わせ、調査とはいえ経典を宝物として丁寧に扱う我々の態度は、民族や国籍の違いを超えて一種の共感を生んだようである。

交流事業の継続を約した両者は、ノルブリンカの文献調査の成果として、一九九九年三月に龍樹の著作とされる『廻諍論』を含む『チベット・ウメ字体梵文写本集成』の共同出版と、同時にポタラ宮所蔵文献の調査について正式な合意に達したのである。

4 ポタラ宮文献調査の実現と『維摩經』の発見

一九九九年七月二五日、成田空港に集合した総合佛教研究所の調査団は、前回の半分の総勢一二名であった。これは、前回の調査で高山病の対応に終始してしまった反省から、実際の調査にあたるスタッフだけにメンバーを絞り込んでいった結果である。翌日、前回と同じく成都を経由して、ラサに入った。文物管理局関係者は空港まで出迎えてくれたが、その日はホテルに直行し、部屋でひたすら休養に努めるが、やはり頭は割れるように痛く、身体が重い。酸素を吸ってみるが、あまり症状は良くならない。翌朝、またしても重症者二名を軍の病院まで運んだ。一人は点滴を受けてすぐに回復したが、もう一名は入院を余儀なくされた。入院したスタッフはチベットの専門家であり、ポタラ宮の調査を誰よりも念願していただけに、その落胆ぶりは言葉にあらわすことができない。二八日の午後になって、調査団は調査にあてられたポタラ宮の紅宮（建物の色によって紅宮と白宮に分けて呼ばれる）の一室に案内された。広さは三〇畳ほどであろうか。窓際には外光が入ってくるが、裸電球が二ヶ所に吊り



ポタラ宮の調査風景

(奥より、高橋尚夫、松濤誠達、大塚伸夫)

下げられているだけで室内全体は薄暗く、壁面全体に経典を収める書棚が設えてあった。その中心に観音を祀った祭壇があり、その前に大きな函が置かれていた。その中に、今回調査を許されたサンスクリット写本が収められていた。

それらの写本には、『ポタラ宮管理処の職員であるブンツォツェテン (Phun tshogs stshe brtan) 氏によって』ポタラ宮所蔵梵文貝葉目録』と称する簡単な目録が作成されており、調査団はその目録を手がかりに調査を開始した。白い手袋とマスクをした女性係員の手で貝葉を幾重にも包んだ絹布が丁寧に開かれていく。我々調査団も白い手袋とマスクをして、取り出された貝葉を頂戴する。この瞬間を世界中の研究者がどれだけ待ち望んだのであろうか。貝葉を壊さないように、丹念に一枚一枚慎重にめくり、調査は粛々と進められていく。ずっと下を向いて貝葉に目を通していくと、やがて息苦しく頭が重く感じられるようになる。マスクをはずし、深呼吸するが、高地に順応しきれていない身体には、念願の文献調査もかなりの難行苦行であった。限られた日数の中では、経函に収められたサンスクリット写本にぎっと目を通し、調査スタッフ各人の関心に従って写本を選び調査を行うということがやっとであった。そうした消耗戦的な状況の中で、七月三〇日、調査スタッフの一人である高橋尚夫大正大学助教授（現教授・総合佛教研究所副所長）の表情が一変し、こちらに向かって目配せをしている。何かとてつもないものを見つけ



ポタラ宮の調査風景

たことは直ぐに察せられた。高橋助教授は真言宗豊山派に属する僧侶でもあり、その密教に対する関心から彼が調査していたのは『仏説大乘入諸仏境界智光明莊嚴經』という密教系のテキストであった。ところが、その経典と同一の帙に『維摩經』が収められていたのである。その写本が非常に重要なものであることがチベット側に知られ、再び秘藏されてしまうことを恐れ、素知らぬ顔で調査を続けるよう高橋助教授に依頼した。今となつては笑い話のようだが、これまでの経験から交流事業がいつ一方的に中断されるか分からないものだけに、『維摩經』の写本が手元に届くまでスタッフは必死だったのである。

5 『維摩經』の共同出版の合意

後述するが、『維摩經』が大乗経典の中でどれだけ重要な位置を占めるものであるかは、仏教を学んだことのあるものであれば誰でも知っていることであろう。その『維摩經』を初めてのポタラ宮の文献調査で発見してしまったのである。我々の次なる目標は、言うまでもなく、その『維摩經』のサンスクリット写本を影印版として全世界に紹介することであった。

万全を期すため、当初我々が出版を望んでいる写本が『維摩經』であることは伏せ、プンツォツェテン氏の『ポタラ宮所蔵梵文具葉目録』に記載されていた『如来得不動妙樂光明瑜伽星曜經』という書名のまま交渉を続けた。



2001年11月9日 『維摩経』梵本の引渡し式 於大正大学

多田孝文教授
 丸山博正教授
 高橋尚夫教授
 栗山秀純教授
 小峰弥彦教授
 吉田宏哲総佛所長
 多田孝正教授
 西郊良光常任理事
 松濤誠達
 馬宜剛ラサ博副館長
 張志忠中国国家文物局
 仁清次仁チベット文物局
 牛黎涛大正大非常勤講師
 達瓦次仁ボタラ宮管理処
 木村周誠総佛主任

出版に関する両者の合意はすぐに得られたが、当方のはやる気持ちとは裏腹に、合意文書の正式な調印には時間が必要であった。これには、チベット自治区文物管理局の関係者のすべてが必ずしも大正大学との学術交流に積極的だったわけではないことと、さらに国宝ともいえる経典の出版には上位機関である中国国家文物局の承認が必要だったことなどが挙げられるであろう。

しかし、日中双方がこれまでの学術交流で築き上げてきた信頼関係によって、こうした難局も何とか乗り越えることができた。二〇〇一年三月、『維摩経』の影印版の共同出版について正式な合意文書を取り交わし、翌四月には民族図書館の調査以来一〇年を超える年月を中国・チベットとの学術交流に心血を注いできた木村高尉大正大学助教授と多田孝文大正大学助教授（当時）らが北京に飛び、写本が遺漏なく印刷のため写真撮影されたことを確認した。あとは『維摩経』の影印版が我々の手元に届くのを待つだけであった。

同年一月、約束通り『維摩經』影印版百部が大正大学に届けられ、翌二月一四日に今回の『維摩經』発見についての記者発表を行ったことはご承知の通りである。現在は、綜合佛敎研究所のスタッフを中心に、影印版とともに刊行する予定の『維摩經』サンスリット写本の「ローマ字転写テキスト」、および「梵藏漢対照テキスト」が作成されている。こうした基礎作業も間もなく終わり、来春には『維摩經』サンスリット写本の影印版が各研究機関を中心に頒布される予定である。いましばらくお待ちいただきたい。

二 『維摩經』の内容とその影響

さて、これまでポタラ宮で発見されたサンスリット写本について『維摩經』と呼んできたが、『維摩經』は鳩摩羅什の漢訳名『仏説維摩詰所説經』に従った略称である。仏敎經典と言えば釈迦の説法を記録したものとこの印象が強いが、『維摩經』は在俗の仏敎信者（居士）である「維摩詰」が主役となったユニークな經典である。「維摩詰」はサンスクリット語の「Vimalkṛti（ヴィマラキールティ）」を音写したもので、「汚れなく名声の高い者」の意だが、一般には「維摩居士」として親しまれている。『維摩經』は比較的短い大乘經典だが、一番古い漢訳は嚴仏調によって一八八年に訳された『古維摩詰經』（現存せず）という記録があるところから一〜二世紀頃に成立したと考えられ、般若經類と同じく初期の大乘經典の一つである。

『維摩經』の舞台となるのはガンジス河中流域の商業都市ヴァイシャリー（Vaisali）で、釈尊はアームラパーリー（Amrapali）という遊女が寄進したマンゴー園に滞在されていた。折しも、大富豪である維摩居士は、その方丈で病に伏っていた。それを聞いた釈尊は、舍利弗（Śāriputra）をはじめとする直弟子（声聞）達に見舞いに行く

ように命じた。しかし、かつて維摩と議論し、その場で厳しく維摩に論破された経験をもつ弟子達は、誰も見舞いに行こうとしなかった。さらに、大乘の「空」義に通達しているはずの弥勒 (Maitreya) 、光嚴 (Prahāyūha) 、持世 (Jagatindhara) といった諸菩薩も、また同様に維摩に論破されているため見舞いに行くことを固辞してしまふ。そこで、文殊菩薩 (Mañjuśrī-Kumārābhūta) がその大役を引き受け、大衆を引き連れて維摩のもとに向かうこととなった。緊迫感さえ漂う様々な問答の中で大乘の「空」が明かされていくが、最終的に文殊菩薩は「空」の境地は言葉によつては言い表せないことを述べる。これに対して、維摩居士は絶対の「空」の境地 (不二の境地) を「沈黙」することによつて表したのである。この場面が「維摩の一黙 雷の如し」と称される『維摩経』のハイライトである。

この簡単な紹介だけでは『維摩経』の豊富な内容を伝えることは出来ないであろうが、『維摩経』の注釈書は中国において盛んに作られたばかりでなく、日本でも仏教伝来から間もなく聖徳太子が『維摩経義疏』を著したとされていることから、その魅力は十分に窺い知ることができようであろう。

まず、『維摩経』には三種の漢訳が現存する。

- (1) 支謙訳『仏説維摩詰経』二卷 (三世紀前半) 大正蔵 No. 474
- (2) 鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』三卷 (五世紀はじめ) 大正蔵 No. 475
- (3) 玄奘訳『説無垢称経』六卷 (七世紀) 大正蔵 No. 476

いずれも大正新修大蔵経第十四巻に収められている。これに先述の嚴仏調訳を加えると、漢訳は四種あることになるが、このことは『維摩経』が中国においていかに重要視されていたかの一つの証左となるであろう。『西遊記』

で知られる玄奘は、ヴァイシャリーを訪れ、維摩居士の遺跡を目撃し、次のように記している。

伽藍東北三里有窣堵波。是毘摩羅詰（唐言無垢稱。舊曰淨名。然淨則無垢。名則是稱。義雖取同。名乃有異。舊曰維摩詰訛略也）故宅基趾。多有靈異。去此不遠有一神舍。其狀壘甍。傳云積石。即無垢稱長者現疾說法之處。
〔大唐西域記〕卷七、大正大藏經五一卷九〇八中

この記述は、玄奘が『維摩經』と維摩居士に対して並々ならぬ思いを抱いていたことを示しているといえよう。

さらに、中国仏教史上に名を残す注釈家はほとんど『維摩經』の注釈を残しているが、その主なものとして、

羅什・僧肇・道生・道融『注維摩詰經』

慧遠『維摩義記』

智顛『維摩經玄疏』・『維摩經文疏』

吉藏『淨名玄論』・『維摩經義疏』

窺基『說無垢稱經疏』

などが挙げられるであろう。日本では主にこれらの中国の注釈書に従って『維摩經』の研鑽が進められており、これには枚挙に暇ないほどである。

また、維摩居士の圖像や彫像も多く制作されている。例えば、甘肅省敦煌の莫高窟第二二〇窟（初唐）東壁北には維摩經變相図が描かれ、病床において說法する維摩が描かれており、同じく第一七窟（晩唐）から出土した、いわゆる敦煌文献には何種類かの『維摩詰所說經變文』が含まれ、山西省大同の雲崗第六窟には維摩像が釈尊を中心に、右に維摩、左に文殊菩薩を配した対論の形で刻されている。

さらに日本では、『維摩經義疏』を著した聖徳太子ゆかりの法隆寺五重塔・第二層には維摩居士像が安置され、興福寺、石山寺、延暦寺、法華寺など多くの維摩居士像が造られている。なかでも興福寺は、藤原氏の病氣平癒を願ってなされたのを由縁とする『維摩会』が開かれることで有名である。

三 『維摩經』サンスクリット写本について

さて、『維摩經』はチベット語にも翻訳されている。九世紀前半、チュニットツルティム（梵名ダルマターシーラ、法性戒）によって訳されたもので、

(1) デルゲ版『東北目録』No. 176

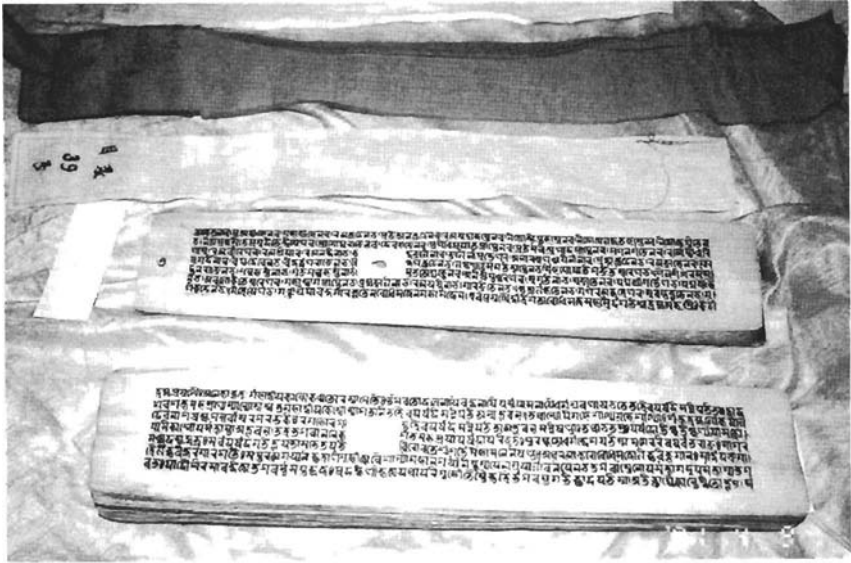
(2) 北京版『大谷目録』No. 843

の二版が利用しやすい。

しかし、今回ポタラ宮で発見されたサンスクリット写本が、そのままチベット訳『維摩經』の原本とは考えにくいようである。写本のコロフォンによれば、

(Ms. 78a) *śrīmad gopāladevārīye saṃvat 12 bhadrādine 29 lekhyate'yaṃ upaśhāyakacandoka (78a) syeti)*

吉祥ゴーパーラ王の治世 (Samvat) 一二年六月二九日に王の侍従であるチャインドーカによって書写されたとある。ゴーパーラ王はパーラ王朝を立てた初代の王であるが、パーラ王朝にはゴーパーラの名を持つ王が三人おり、初代は八世紀後半、二人目は一〇世紀後半、三人目は一二世紀中頃の人物である。ここに記されたゴーパーラ



今回発見された『維摩經』 サンスクリット写本

王がいつの時代の王に当たるのかは未確定であるが、チベットでは九世紀半ばのランダルマ王によって破仏が行われ、写本類が失われてしまったことを考慮すると、初代ゴパーラ王の時代の写本である可能性は少ないであろう。

だが、写本の保存状態は極めて良好で、三〇×六cmの貝葉に表・裏各七行ずつ記され、七十八葉からなる完本である。また、俗に *Nepalese* と称される書体で記されているが、文字も達筆で読みやすく、文法的にも非常に正確であることが判明しており、この『維摩經』写本が第一級の資料であることは間違いない。このことは影印版の刊行によって、間もなく証明されるであろう。

四 チベットとの学術交流の将来

大正大学の総合佛教研究所を中心としたチベットとの学術交流は、今回の『維摩經』の発見をもって終止符が打たれたのではない。実は、一九九九年の調査に続いて、二〇〇一年にもポタラ宮の文献調査を実施している。しかし、その調査で直視しなければならなかったことは、何よりもポタラ宮、そしてチベットの仏教が置かれている学



1999年7月 ポタラ宮前広場にて（ポタラ宮調査チーム）

上段
大塚伸夫
木村周誠
米澤嘉康
高橋尚夫
木村高尉
福田高德

下段
牛黎涛
西郊良光
松濤誠達
松濤泰雄
多田孝文

問的な状況であった。ポタラ宮にはかなりの数、おそらく三百を超える数の僧侶が住止していると考えられるが、その中でもサンスクリット語を読めるものは先述の『ポタラ宮所蔵梵文貝葉目録』を作ったブンツォツエテン氏を含めても二、三名ということである。したがって、サンスクリット写本の整理はほとんどブンツォツエテン氏が一人で行っており、第一回のポタラ宮の調査から丸二年が経過しているにもかかわらず、『ポタラ宮所蔵梵文貝葉目録』に追録されていたのは八部ほどであった。仏教にとって貴重な財産であるサンスクリット写本が、広く世界中に公開され共有の財産となるためには、チベットの人々が自分達の仏教の学問的な伝統を復興さ

せることが不可欠なのである。

その道程は遠いものとなるかも知れない。しかし、我々は研究者としてではなく、同じ仏教者として、それを少しでも手助けしたいと願っている。若いチベットの僧侶を日本に迎えて教育する、それが無理ならば日本人がチベットに行つてサンスリット語を教える、いずれにしても大事なことは人間どうしの交流を絶やささないことであらう。

これまで十年余にわたつて中国との学術交流を担ってきた人々は、そろそろ第一線を退くときを迎えたようである。しかし、これまでもそうであつたように、次代の学術交流もまた人と人との繋がりから生まれてくるはずである。このことは我々に共通する一つの確信であり、心からその実現を願つてやまないものなのである。

(大正大学学長)